

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	付論 サラザンとマザリナード
Author(s)	野呂, 康
Citation	フランス文学 , 33 : 77 - 86
Issue Date	2021-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051036">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051036</a>
Right	
Relation	



## 付論 サラザンとマザリナード

野呂 康

以下、1.講演の経緯、2.本訳稿の説明と解説、そして3.訳者の見解の順に記す。

### 1. 講演の経緯

本訳稿は2019年7月6日に岡山大学にて開催された講演会の記録である。講演は日本フランス語フランス文学会中国・四国支部が主催し、岡山大学全学教育・学生支援機構・基幹教育センター・初修外国語系の共催を得て行われた。当日ご挨拶いただいた久保田聡系長（岡山大学）、司会の萩原直幸先生（同）にお礼申し上げる。

アラン・ジェヌチオ氏はロレーヌ大学（フランス）教授であるが、この時期京都大学が招聘し客員教授として来日されており、同大の永盛克也教授から打診があったため、急遽支部の年次大会以外での特別講演会を開催する運びとなった。ジェヌチオ氏はフランス17世紀の詩を中心とした研究で知られ、同分野に関する著書の他、複数の論文、詩論、翻訳（共訳）を発表されている。また2014年以来、フランスで最も権威ある研究誌の一つである『フランス文学史雑誌』<sup>1)</sup>の編集責任を担当されている。さらに、以前に京都大学で教鞭をとられていた関係で、日本での講演も多い。この度の日本滞在時に中国・四国支部でご講演いただけたのは光栄であるとともに、訳者個人としても17世紀フランス文学について直接ご教示いただける千載一遇の機会であった。そのため、以前より関心のあったサラザンという作家、そしてサラザンが執筆したとされるマザリナードについてお話しくださるようお願いした次第である。その後講演題名として「サラザンのマザリナード 古典主義文体へ向けて」<sup>2)</sup>とご提案があった。

ジェヌチオ氏からは事前に2本の既発表の論考と講演版原稿が送られてきたため、当日通訳を担当した訳者は翻訳し準備を進めた<sup>3)</sup>。当日は講演版原稿から作成した

<sup>1)</sup> *Revue d'histoire littéraire de la France*. 創刊は1894年に遡り、現在は年間4号と特別号が刊行されている。

<sup>2)</sup> « Les mazarinades de Sarasin - vers le style classique »

<sup>3)</sup> Alain GÉNÉTIOT, « Sarasin, un écrivain dans la Fronde », dans *Gueux, frondeurs, libertins, utopiens. Autres et ailleurs du XVII<sup>e</sup> siècle*, dir. Sylvie REQUEMORA-GROS et Philippe CHOMÉTY, Presses Universitaires de Provence, 2013, p.51-

引用文一覧の他、講演内容に鑑みフロンドの年譜と、訳者による古典主義美学の用語解説を合わせて配布した<sup>4)</sup>。

本訳稿は講演用原稿を底本としたが、既発表の論考には詳細な註や出典が付されていたため、講演者の許可を得て訳出しながら註を補った。以上の経緯から講演原稿の註（講演時の引用部分に該当）と既出論文（「大貴族の代弁」）のそれを一括して「原註」とし、それ以外を通訳・翻訳者の付した「訳註」として区別している。講演時には時間の都合で後半の一部の引用が省略されたが、本訳稿でも紙幅の都合でやはり同箇所を省略せざるを得ず、その旨訳註で明示しておいた。

手元に届いた既発表の論考はどれも、フランス 17 世紀の詩人ジャン・フランソワ・サラザンに関するものであった。「フロンドの作家、サラザン」（2013 年発表）はフロンドの時期にコンチ親王に仕えていたサラザンの経歴を中心に、その前後の活動とフロンド期のパンフレに焦点を当てた論考であり、「大貴族の代弁、サラザンのマザリナード」（2016 年発表）は部分的には重複を含むとはいえ、サラザンのテキスト（韻文、散文、パンフレなど全てを包括する）に古典主義のエートスと貴族倫理の浸透を見た意欲的な論考である。講演では前者から経歴や活動の紹介を補いつつ、主に後者の論考から説明がなされた。

以上のように、サラザンのテキストに見られるフランス古典主義時代のエートスと貴族倫理が本講演の主題となる。当時の作家は原稿料や書籍の売り上げで生計を立てることなど思いもなかった。貴族宅に身を寄せ、従僕として仕え、庇護者に筆で奉仕した。これをクリアンテリズム（保護-被保護の関係）という<sup>5)</sup>。作家は自由な物書きではなかったし、詩作にしても個人的な感情の吐露とは言いきれない。サラザンは主に貴族のサロンで活動し、詩作品の多くはサロンに参加する極めて限定された公衆に向けて発せられた。しかしそれでも、活動の全てが主人への奉仕に還元され、個人の発意が奪われていたかといえそうではない。作家は自己の確信を託しつつ、主人のために執筆ができた。そこには現代が想い描くような盲目的な隷属、あるいは心的な葛藤はない。サラザンの経歴とその作品群をたどりながら、

60; « Porter la parole des grands : les mazarinades de Sarasin », dans *Histoire et civilisation du livre*, XII, Librairie Droz, 2016, p. 211-224.

<sup>4)</sup> 年譜は以下の書から、嶋中博章氏が作成した「マザリナード関連年表」の抜粋を一部修正した上で配布した。クリスチアン・ジュオー（嶋中・野呂訳）『マザリナード 言葉のフロンド』水声社、2012, pp.316-319.当日配布した用語解説は、付論作成にあたり本文に繰り込んだ。

<sup>5)</sup> クリアンテリズムと当時の作家の身分については以下の書及び付録の拙稿を参照されたい。クリスチアン・ジュオー（嶋中・杉浦・中畑・野呂訳）『歴史とエクリチュール 過去の記述』水声社、2011 及び拙稿、主に pp.210-215.

作品に個人としての作家の才能を見ようとする現代の文学批評に揺さぶりをかける有意義な講演であった。

## 2. 本訳稿の説明と解説

次に翻訳の過程を説明しながら、作家と作品をめぐる、決して自明ではない関係についてもう少し掘り下げて考察したい。

本訳稿では、古典主義美学の特徴を表す幾つかのキーワードにルビあるいは傍点を用いている。まず「雅」あるいは「雅な恋愛」を表す *galant* という語である。この語は、今日でいえば作品の傾向あるいは文学のジャンルと見なすこともできようが、発表の場としてのサロンがあり、サロンでの流行があるからこそ、ある種の傾向を担う作品は生み出される。したがってこの語にもクリアンテリズムの刻印が押されている。サラザンの活動したのは、ヴォワチュールに代表されるサロンの詩の最盛期である。社交界ではバロック的な修辭や隱喩がパロディのように用いられ、人々を楽しませるための軽く雅な恋愛表現が流行していた。サラザンはこれに乗じて「雅な恋愛」詩人として活動していた。*galant* は形容辭で、「雅な恋愛美学」(*esthétique galante*、ヴィアラ)、「雅な事柄」(*choses galantes*、ペリソン)など名詞も修飾する。詩人の形容もすれば(*poète galant*)、名詞化されて(*galanterie*)「雅な恋愛術」のように行為も表す。「雅な恋愛詩人」であるサラザンは、「雅な恋愛」の流行を受け入れ「雅な恋愛」詩を執筆し、「雅な恋愛術」の表現で地位を確立する。冗語のように見えようとも、当時の流行と好み、そして詩人の選択を一つの現象として把握できるよう、本訳稿では文法上の差異を抽象し「ガラン」とルビを振った。

「ガラン」と対照をなすのが、高貴なテーマを卑猥な表現やくだけた文体で表現する「ビュルレスク」というジャンルである。文学史においては、サラザンとほぼ同時代に活動したポール・スカロンがその代表とされる。ビュルレスクはほぼ「滑稽」という訳語で統一した上で、普通名詞と区別するためにやはりルビで示した。

その他には、当時の社会と文学の傾向を表す言葉として「古典主義」と「悲劇」が登場する<sup>9</sup>。古典主義といえば一般にマザランの没後、ルイ十四世の親政開始(1661年)以降の文学的傾向を指す概念だが、そのような区分からは17世紀前半～中葉はその萌芽期にして準備期間とみなせよう。17世紀前半にはマレルブによ

<sup>9</sup> 古典主義関連語彙については以下の書を参照した。エイコス：17世紀フランス演劇研究会編『フランス17世紀演劇事典』東京、中央公論社、2011。

り規則正しい詩法が提唱され、ヴォワチュールに代表されるバロック的な修辞やパロディが登場し、雅が宮廷やサロンで受け入れられる。本講演ではほぼ同時期の悲劇の流行と合わせ、「古典主義へ」至る流れとして論じられている。

古典主義を構成するのが、宮廷を中心に洗練されつつある「社交礼儀」と「ほんとうらしさ」の概念である。ビアンセアンス<sup>ビアンセアンス</sup>は古典主義時代の判断基準の一つで、「習慣や礼儀」(ゲズ・ド・バルザック)のごとく当時の用法に起源を持つ。元々は「ふさわしさ、適切さ」を表す語であり、礼儀にかなう振る舞いを指す場合には「礼儀正しさ」と訳せよう。それゆえあり方、形式、作法などの一貫性を可視化すべく、見慣れないカタカナではあるが「ビアンセアンス」とルビを振ることにした。

「ほんとうらしさ」あるいは「真実らしさ」とも訳される *vraisemblance* は、16 世紀に原典が発見されたアリストテレスの『詩学』に由来する概念で、特に 17 世紀の演劇論では、そのあり方をめぐり喧しく議論された。「ほんとうらしさ」をめぐる議論や定義には立ち入らないとして、要するに出来事や物語が「ありそうなしかたで」語られ、観客あるいは読者が語りに真実を見出し信じれば「ほんとうらしさ」は成立する。サラザンのテキストでは「ほんとうらしい」づくりごとが語られ、いかにも「ありそうな」世論が形成される。だがビアンセアンスやガランと異なり、「ほんとうらしい／ほんとうらしさ」という語は一般的な形容辞や名詞としても使用されるため、関連語彙に傍点を付し明示することにした。

「悲劇」は、前世紀に引き続き 17 世紀前半から半ばにかけて流行した演劇の一ジャンルである。当時を代表する詩人として、古典主義時代の三大劇作家に数えられるコルネイユが挙げられる。彼の『ル・シッド』(1637 年初演)は文芸者やアカデミを巻き込み、「ほんとうらしさ」や「三単一の規則」をめぐる論争を引き起こした。ところでアリストテレスは『詩学』の悲劇に関する箇所で、「哀れみと恐れ」を情念の浄化と結びつけている。サラザンは当時の劇理論を踏まえ、悲劇の形式を借用して散文を執筆したとされる。サラザンのマザリナードでは主人公が英雄となり、悲劇の特徴である悲愴が漂う。哀れみと恐れが盛り込まれ、読者に強く訴えかけてくる。登場人物の性格にもやはりアリストテレスに由来する「トポス」の概念が利用され、巧みにエートスが構築される。要するにサラザンは同時代の劇作術を意識しながら、庇護者のために出来事を悲劇に仕立て上げたのだ。以上のように悲劇の劇作術、判断基準としてのビアンセアンスや「ほんとうらしさ」が同時に把握できなければ、サラザンの営みと背景となる文学ジャンル、そして古典主義美

学の鼎立関係が立ち現れてこない。そうなれば、サラザンの営みは単なる技法や好みとして、作家個人の資質に還元されかねない。それを避けるためにも、本訳稿では悲劇をめぐる関連語彙に一貫してルビを用いた。

＊

サラザンを詩人として、流行のジャンルと併記するにとどめる伝統的な文学史の記述に対して、本訳稿では宮廷社会のプロトコルと悲劇を通して古典主義美学を体现したサラザンの営為が明らかにされている。これらに加えて、サラザン再評価の手がかりとなるのがマザリナードである。

まずマザリナードとは何か。フランスでは 1648 年にパリのブルジョワが大規模な反税暴動を起し、司法と行政機関にあたる高等法院がこれに連座して政府に反旗を翻す。これがフロンドと呼ばれる内戦の嚆矢となる。その後高等法院と王権は和解するが、宰相マザランと王家に連なる「殿下たち」が対立し、覇権争いへと発展する。最終的には 1653 年に、血統親王の筆頭であるコンデ親王が拠点としていたボルドーが降伏し、一般にフロンドは終結したとされる。この間武力闘争のみならず、各党派間で無数の文書戦略が展開された。マザリナードとはこの時期に出版された大小様々なパンフレヤ印刷物の総称で、現在では 5000 程度の文書がこれに分類されている<sup>7)</sup>。

サラザンはその経歴の諸段階で、文体と執筆方法を習得したとされる。国務秘書官シャヴィニの下での政治・外交経験を生かし法律文書の知識を得、学者との交流から歴史の執筆に手を染め、ゴンディ（後のレ枢機卿）、コンチ親王、ロングヴィル公夫人の下では貴族倫理と社交界のプロトコルを学ぶ。フロンド期にサラザンは、マザランと対立する親王と夫人を代弁する形で、状況に応じて幾つかのマザリナードを執筆した<sup>8)</sup>。ジャンルを跨いで執筆した多作な作家を、今日の文学史ではやや否定的なニュアンスを込めて「ポリグラフ」と呼ぶ。一方で経歴と執筆ジャンルの緊密な結びつきは、クリアンテリズムの一つの帰結と考えられよう。他方で、クリアンテリズムの論理とマザリナードは直結する。こうしてマザリナードは、多彩なジャンルと技法を身につけたポリグラフであるサラザン晩年の集大成の観を呈している。

<sup>7)</sup> 前掲『マザリナード 言葉のフロンド』を参照のこと。

<sup>8)</sup> サラザンの経歴と執筆活動の関係については、本訳稿でも言及のある論考（「フロンドの作家、サラザン」（本付論註 3））でより詳細に論じられている。

サラザンのマザリナードは全て匿名で書かれているが、それらは紛れもなく古典主義美学のプロトコルに準じて執筆されている。『支離滅裂』ではヴォワチュールの模倣による価値の転覆と滑稽で軽やかな調子が観察される。やや趣を異にする『旋律にのせて』でも社交界への目配せがなされている。スカロンの滑稽ビュルレスクやシラノの諷刺とは異なり、節度が保たれ「鋭く人をからかう技術」が用いられている。これこそ社交礼儀の実践といえよう。散文であるマザリナードは社交界とは異なる読者層、すなわち世論に向けて発せられる。『ロングヴィル公夫人から王への手紙』では法的知識が駆使され、『殿下たちの擁護』は公開書簡のように書かれる。『ロングヴィル公夫人の声明文』は最初から世論に狙いを定めており、『親王妃の死と最後の言葉』、『好意的なフロンド派』、『パリの教会財産管理人から主任司祭への手紙』は、攻撃対象の違いにかかわらず、なべて殿下たちを擁護し世論に働きかけている。何よりテキスト上では、古典主義の「ほんとうらしさ」に準じた人物設定がなされ、悲劇が構築される。そこでの殿下たちはコルネイユの悲劇に登場する、貴族倫理を体現した寛大で王に忠誠を誓った英雄そのものである。

匿名でしかも庇護者の思想を代弁しているにすぎないとしても、これらこそまさしく古典主義の浸透した文学であり、それもサラザンという優れた筆でなければ構築しえぬ文学作品である。講演者の論理と分析は間然するところがない。

### 3. 訳者の見解

マザリナードは長らく好事家の収集対象とみなされ、信憑性の観点から歴史研究では敬遠され、文学研究の資料としても看過されてきた。それゆえ文学研究者からのマザリナード利用法の提案ともなっている本訳稿は、模範的かつ意欲的な文学研究であるといえる。しかしそれでも、研究は約束事の上に成立している。文学が複数の読みに開かれているように、それを対象とする研究にも、採用の是非は別として、複数の方法論が存在する。講演者の申し分ない学識と透徹した解釈に敬意を表しつつ、最後に2点だけ筆者の考えを述べておきたい。

＊

第一に、いわゆる帰属( attribution )の問題である。ジェヌチオ氏が指摘しているように、マザリナードに分類されるほとんどの文書は匿名で書かれている。それでは作家の署名のないマザリナードに対して、どこまで執筆者を特定できるのか。

マザリナードの執筆者を特定するには、幾つかの方法がある。1) 執筆者本人あるいは論敵の証言が存在する、2) 作家の死後に友人あるいは作品集などの編纂者が事情を明かす、3) 後世の研究者の考証による、4) 3) のヴァリエーションとして、どこかの時点で何らかのテキスト（証言、告白、場合によっては推測）を基に帰属が主張され伝承される、等々が考えられるが、1) から次第に確実さの度合いが下がり、特に 4) は思い込みや誤伝承の可能性が拭いきれない。

本訳稿で言及されているのは、サラザン 11 点、スカロン、シラノ、レ、その他が各 1 点、合計 15 点のマザリナードである。まずはサラザン以外のもののうち 1) に分類可能で、帰属がほぼ確実視されているのは、『パリ大司教補の行動に関する公平無私な意見』<sup>9)</sup> だけである。伝統的にスカロンに帰される有名な『ラ・マザリナード』は、19 世紀に記念碑的なマザリナード書誌を作成したセレスタン・モローさえ真偽のほどを疑っている<sup>10)</sup>、2) と 3) の間に分類されよう。シラノへの帰属の根拠は脆弱である<sup>11)</sup>。

それではサラザンはどうか。まずお断りしておかねばならないが、筆者は講演者が依拠するサラザンの 1926 年版『作品集』を参照することができなかった<sup>12)</sup>。引用の多くはこの『作品集』からなされているため、サラザンのマザリナードとして収録されていることが推測される。それならば 2) あるいは 3) に該当するだろうし、編者は収録にあたり、モロー以降の研究の成果を踏まえ根拠を記しているはずである。これを参照していないのは致命的であるが、他方で開き直りのようだが、帰属を証明する新たな証拠（例えば直筆原稿や執筆を裏付ける証言）が提示されているとは

<sup>9)</sup> レ枢機卿は後の『覚書』で自身の筆によるマザリナード 7 点を列挙している（パンフレ全体では計 8 点）。Cardinal de RETZ, *Œuvres*, Marie-Thérèse HIPP et Michel PERNOT éd., Paris, Gallimard, 1984, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», p.625. 実は本訳稿で言及される『公平無私な意見』はこれに含まれないが、モローに続きプレイアード叢書の編者もレの筆をほぼ確実視し、「補遺」に全文を収録している。CM510 の説明では、レに敵対する『或るボルドー人の手紙』の著者がレの筆を確信しているらしいので、その場合 1) に該当しよう。

<sup>10)</sup> モロー以降の研究もあるだろうが、スカロンへの帰属を否定するモローは、特に同時代人ギ・パタンと 1721 年に刊行された『スグレ言行録』（Jean Renault de SEGRAIS (1624-1701)）に關係した文書集成）の二大典拠の信憑性に疑いを挟んでいる。Célestin MOREAU, *Bibliographie des Mazarinades*, 3 vol., 1850-51 (Burt Franklin reprint), t. II, pp.260-262(CM2436).

<sup>11)</sup> 拙論「伝記記述と作家の生涯 日本におけるシラノ・ド・ベルジュラックの受容」（日本フランス語フランス文学会・中国・四国支部『フランス文学』、no. 32、2019、p.96, n. 16）を参照のこと。モローの書誌にはシラノの名はなく、最新の全集第 1 巻編者のアルコヴェールはシラノの執筆を否定し、第 2 巻編者の一人であるキャリエはシラノの作品として収録している。つまりこの最後の編者による扱いのみが、3) に分類する根拠となる。

<sup>12)</sup> 本訳稿で言及されている 1674 年版『新作品集』も参照していないが、こちらにマザリナードが収録されていれば、当然その経緯と考証に関してモローが言及していただろう。



考えにくい<sup>13)</sup>。だがこれ以上は踏み込まず、以下ではモローによる考証までを踏まえて継続する。

本訳稿でサラザンのマザリナードとして扱われ、1)に分類できるのは『支離滅裂』と『パリ大司教補の行動に関する、パリの教会財産管理人から主任司祭への手紙』のみである。それも作者本人の認定ではなく、前者はタルマン・デ・レオー<sup>14)</sup>、後者はレ<sup>15)</sup>の証言による。その他かろうじて3)に分類できるのが『好意的なフロンド派』と『ギュイエンヌでの事件のための覚書』であり、これはそれぞれ本人以外の誰かが版本の「欄外」にサラザンの名を書き込んだという事実のみに依拠している<sup>16)</sup>。書き込みの時期も定かではない。その他全ては1926年版『作品集』に収録されているという事実により3)に分類されるが、前述の通り参照していないため真偽のほどは判断できない。

要するに、幾つかのマザリナードをサラザンに帰属させる根拠は、同時代人の証言を基にした2点を除けば、これまで刊行された『作品集』に掲載されたという事実しかない。しかしこれはあくまで後の研究者による考証の結果であり、証言ではない。

## \* \*

第二に、マザリナードと他の文学作品の関係について私見を述べる。マザリナードと他の文学作品は如何なる視点から接続可能であろうか。例えば文体の比較は可能だろう。ビュルレスクのようなジャンル研究にも裨益しよう。同一事件をめぐる表現の相違も窺えるかもしれない。宗教に関係したマザリナードなら、神学論争の文書と付き合わせてみるのも興味深い。しかし作家名で両者を繋ぐのはどの程度まで妥当性を持ちうるか。

帰属の問題についてはすでに触れた。ここで仮に、同一作家の手になるマザリナードとその他の作品があるとして、一方における文体特徴や思想を他方に読み込め

<sup>13)</sup> 文学研究の立場からマザリナード研究を推進した大家ユベール・キャリエもサラザンからの引用は全て1926年版から行い、帰属への如何なる疑義も挟んでいないが、同時に編者による考証に関する言及もない。Hubert CARRIER, *Les Muses guerrières*, Paris, Klincksieck, 1996.

<sup>14)</sup> Gédéon TALLEMENT, sieur des Réaux (1619-1692). 『逸話集』 (*Historiettes*) の著者。以下の箇所が『支離滅裂』の初版である『グラモン元帥に現れたヴォワチュールの亡霊』に触れている。TALLEMENT DES RÉAUX, *Historiettes*, Antoine ADAM éd., Gallimard, 2vol., 1960, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, p. 500. V. CM797, t. I, p. 237.

<sup>15)</sup> Cardinal de RETZ, *op. cit.*, p. 625.

<sup>16)</sup> 『覚書』については本訳稿の註64、『好意的なフロンド派』については、以下の説明を参照のこと。「私[モロー]はアルスナル図書館で、このパンフレットの版本の一つに、サラザンによるとした手書きの注意書きを見た。」(CM1451, t. II, p. 421). V. CM797, t. I, p. 237.

るだろうか。講演者はシャヴィニの秘書をしていたサラザンの経歴と、法律や歴史を記述する文体と知識を照合し、サラザンの特徴としてマザリナードの分析に用いている。あるいは貴族への奉仕から得た貴族倫理とその価値観を、文芸者として身につけた劇作術を駆使して悲劇へと投影し、マザリナードを執筆したとする。雅な恋愛文学の文体は『支離滅裂』に刻印されており、「価値の転覆」を目指す「滑稽で軽やかな調子そのもの」がサラザンによるマザリナードの特徴とされる。韻文と散文、限定された公衆と操作対象である拡大された公衆の違いは周到に認められているとはいえ、韻文の作品に「政治的」に「鋭く人をからかう技術」を読み込むところまであと一歩であろう。

かつてマザリナードを分析するにあたり、歴史家クリスチアン・ジュオーは世論をめぐる循環論法について指摘していた。マザリナードに世論が反映されているとして、反映されているはずの世論はそれを反映する媒体としてのマザリナードからしか把握できない。それなのに、世論を反映しているはずのマザリナードから世論の存在が証明される。また、マザリナードは世論を操作するために書かれたとして、そのマザリナードから操作対象としての世論が認知され証明されてしまう。

作家の名を冠したマザリナードと文学作品の関係からも、同一の構造が透けて見えないだろうか。サラザンの文体と経歴がマザリナードに読み込まれ、マザリナードからサラザンの経歴が跡づけられ、文体特徴が導き出される。作家名を蝶番に、クリアンテリズムと状況の産物であるマザリナードと文学作品、この両者が統一された世界が形成される。それは作家と作品の関係性に関する確信、そして文学研究の伝統と考証への揺るぎない信頼に由来した方法論のなせる技に違いない。

筆者の感じているのは、この信への戸惑いである。作家名の判明しているごく一部のマザリナードを除けば、よそのところで練り上げられた作家の特徴なるものを匿名のマザリナードに読み込み、あるいは逆に、マザリナードで観察された経歴、思想、文体に類似を理由に作家の特徴を発見し、別の作品に読み込んでしまえば、解釈は否応なく作家名の方向に牽引され、回収不能なほどの一義性を担わされてしまうのではないだろうか。マザリナードは作家の貴族への奉仕であり、「貴族の代弁」であることに異論はない。そこに作家の痕跡、作家性なるものを見ようとするれば、雅や社交礼儀、悲愴感を漂わせる文体となるかもしれない。しかしそれでは結局のところ、文学、あるいはテキストの存在意義が作家の文体や修辞技法に限定されてしまうことにならないだろうか。

講演当日に配布した引用部分の翻訳にいち早く目を通し、後日誤訳や誤解の指摘をしてくださった永瀬春男先生（岡山大学名誉教授）、講演時のみならず、本訳稿の作成時に幾つかの質問に快く答えてくださったジェヌチオ氏に感謝する。